

第1回 舞台芸術科（仮称）設置検討協議会

議 事 録

- 1 日 時 平成 29 年 12 月 26 日（火）
午後 2 時 30 分～ 4 時 30 分
- 2 場 所 神奈川県庁 新庁舎 5 階 新庁応接室
- 3 出 席 者 能祖 將夫 川端 麻穂 荒木 正
久我 肇 田中 俊穂 堀江 信夫
眞野 純 （敬称略）

1 開会

(事務局)

定刻になりましたので、ただ今から第1回舞台芸術科（仮称）設置検討協議会を始めさせていただきます。私は、神奈川県教育委員会県立高校改革担当課長の宮本と申します。よろしくお願いいたします。本日は、第1回目の協議会ということでございますので、協議会の会長及び会長代理の指名までは、私の方で進行を務めさせていただきます。また、今回、傍聴御希望の方がいらっしゃっておりますので、この後、議事進行のこの会議の公開の可否についてお諮りいただくところまで、公開とさせていただきます、傍聴者の方に入室いただきます。それでは、始めに、神奈川県教育委員会桐谷次郎教育長からごあいさつ申し上げると共に、検討事項について、依頼申し上げます。

2 教育委員会あいさつ

(桐谷教育長)

皆様、こんにちは。教育長の桐谷でございます。皆様方におかれましては大変お忙しい中、当検討協議会の構成員をお引き受けいただきまして、また、本日御出席をいただきまして、本当にありがとうございます。既に御案内かと思いますが、現在、県教育委員会では、平成28年度から12年間かけまして、社会の動きや時代に見合った県立高校を作っていくという県立高校改革を進めております。大きな目標が3つございまして、1つ目は教育の質を高めていく、2つ目はそれを支える学校の経営力、これを高めていくと。そして3つ目は、現に子どもの数が減っていく中で、県立高校の適正規模、再編・統合等を目指していくと。この3つの大きな目標を持っております。そのうちの教育の質の向上の中で掲げておりますのが、社会のニーズに見合った専門学科の充実を図っていくと。これは、工業、農業、商業という産業系と同時に、外国語やスポーツ、文化・芸術等の個性系の専門学科の充実を図っていきたくと。そして、平成27年の1月に「県立高校改革基本計画」を定めております。その計画におきましても、外国語やスポーツ、あるいは芸術関係の学科の新設、改編等を進めていくという形で掲げさせていただいております。実際に現在、工業や商業については、別途の審議会を設けておりまして、そこで御議論も頂いております。そうした中、もう御案内かと思いますが、国の第3期教育振興基本計画の策定に向けた基本的な考え方が今年2月に出されており、その中では、グローバル化ですとか、時代の流れに沿った形で、文化・芸術に関する人材の育成、その重要性が謳われております。それと同時に他の都道府県を少し見ますと、東京都や大阪府、埼玉県等におきまして、舞台芸術も含めた、様々な文化芸術活動の教育が展開されており、いわゆる人材の育成にとって舞台芸術等の有用性、このあたりが大きく出されているという状況でございます。そうしたことを踏まえまして、私共教育委員会と致しましては、県立高校改革のⅡ期の計画、12年間を3

期に分けておりました、Ⅱ期の計画が2020年度からスタートでございます。そのⅡ期の計画の中で、舞台芸術に関する学科の新設ができないか、そこを目指していきたいというのが基本的な考えでございます。そうした意味で、今回幅広く舞台芸術に係る学科の基本的な枠組に関することを幅広くご検討をいただくため当協議会を設置させていただきました。概ね来年の6月頃を目途に基本的な枠組というところで検討・協議をいただきまして、取りまとめという運びになればと考えております。実は、県立高校改革のⅡ期計画につきましては、来年の秋以降に計画として定めてまいりたいと考えておりますので、でき得れば、その段階で舞台芸術に関する学科についても取り込めればと考えております。若干短期間の中で御検討をいただきます。大変お忙しい中で皆様方にご苦勞をいただくかなと思っておりますが、神奈川におきましては、新しい試みということで、それぞれのお立場から忌憚のない御意見を頂き、取りまとめができればと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

3 委員紹介

(事務局)

それでは、今回が最初の会議でございますので、ここで構成員の方々を紹介させていただきます。恐縮ですが、お配りしてございます名簿の順でご紹介させていただきます。県教育委員会では、様々な提案型研究に取り組んでございまして、その中で、平成26年度から平成28年度にかけて、舞台芸術の表現活動を中心とした自己表現・他者理解の研究に取り組まれた神奈川県立神奈川総合高等学校の現在の校長でございます、荒木正様でございます。県中学校文化連盟演劇専門部会の部会長でございます、横浜市立舞岡中学校校長の稲童丸克己様でございます。本日は御欠席でございます。県高等学校文化連盟演劇専門部会部会長であり、神奈川県立鶴嶺高等学校校長である、川端麻穂様でございます。神奈川県教育委員会教育局県立高校改革担当局長の久我肇様でございます。神奈川県教育委員会教育局指導部長、田中俊穂様でございます。桜美林大学芸術文化学群教授、能祖将夫様でございます。神奈川県立青少年センター館長、堀江信夫様でございます。神奈川芸術劇場館長、眞野純様でございます。以上、8名の方々でございます。よろしくお願いいたします。

教育長は、所要のため退席をさせていただきます。

(教育長)

皆様、本日はよろしくお願いいたします。

4 会長及び会長代理指名

(事務局)

次に、会長及び会長代理の選出に移らせていただきます。資料1の要綱の第6条第2項にございますように、会長は構成員の互選により定めることとさせていただきます。皆様より、どなたか会長として御推薦をいただけませんかでしょうか。

(眞野構成員)

私たちの多くは県や県関連の立場でございますので、ここは、能祖さんの少し違った立場からとりまとめを是非お願いしたいと思っておりますがいかがでしょうか。

(出席者一同賛成)

(事務局)

能祖様を会長に、とのご意見にご賛同をいただきましたので、能祖様に会長をお願いしたいと思います。それでは、能祖会長からごあいさつをいただきたいと思っております。よろしく申し上げます。

(能祖構成員)

ただいま会長を仰せつかりました能祖でございます。眞野さんから県関連でない方ということでご推薦をいただきましたけれども、私は桜美林大学という、これは私立大学なんですね、在野の者でございまして、若干粗野な部分もございますかと思っておりますけれども、非力ながら一生懸命やらさせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。先程、教育長からお話がありましたように、今、神奈川県では県立高校改革実施計画の第Ⅱ期での設置を検討している舞台芸術関連学科の基本構想について、本日から話し合いを進めていくということでございますけれども、僕らにとっては、僕らというのは業界の人間にとってはということでもあるんですけれども、とても良い機会だと思いますし、今、生きる力が弱いといわれている子どもたちに舞台芸術を通じて何かしらの貢献ができる、あるいは彼らのビジョンをひらく拓くような夢のあるもの、夢に終わらないものにしていくべく皆様のお力をお借りできればと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

(事務局)

どうもありがとうございます。続いて、会長代理の指名に移らせていただきます。要綱の第6条第4項に会長が不在のときは、あらかじめ会長が指名する者が代理することとさせていただきます。早速で申し訳ございませんが、能祖会長に会長代理の指名をお願いいたします。

(能祖構成員)

この場は、県立高校の新たな学科の設置を検討するという事ですので、県立高校の校長であり、県高等学校文化連盟演劇専門部会の部会長でもある川端様にお願いできればと思います。よろしいでしょうか。

(出席者一同、了承)

(事務局)

会長代理の指名がございましたので、川端様にごあいさつをいただきたいと思えます。

(川端構成員)

ただいま会長からご指名をいただき、会長代理を仰せつかりました川端でございます。皆様のご協力をいただきながら、能祖会長を補佐し、円滑に協議会を進めていくよう努めてまいりますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

(事務局)

どうもありがとうございます。以上で会長、会長代理が決定いたしましたので、これからの議事につきましては、会長にお願いをいたします。

5 議事

会長 (能祖構成員)

それでは、会議次第の3の議事に入りたいと思えます。(1)「会議公開の可否について」でございます。本日は、第1回目の会議ということですが、本協議会については、協議を原則として公開にしたいと考えております。ただし、未成熟な情報を含む議論が展開され、非公開とすることが望ましい場合には、非公開とさせていただきますと思えますがいかがでしょうか。

(出席者一同、了承)

はい、ありがとうございます。それでは、本日は、基本コンセプトについて協議しますが、これについては非公開とする理由もないので、協議を公開として行うこととしたいと思えますがいかがでしょうか。

(出席者一同、了承)

それでは、公開で行います。また、附属機関等の設置及び公開等運営に関する要綱の第9条に、議事録については、ホームページに掲載するなど広く情報提供する

としていることから、こちらも原則公開といたしたいと思いますが、よろしいでしょうか。

(出席者一同、了承)

また、県民の方々への迅速な情報提供の面から、協議結果等を簡潔にまとめた速報も必要ですが、この作成に当たりましては、私に御一任願いたいと思います。それでは、(2) 舞台芸術科(仮称)の設置に向けた検討事項について協議したいと思います。まずは、事務局から説明をお願いします。

(事務局)

資料2を御用意いただきたいと思います。県立高校における舞台芸術科(仮称)の新設についてということでございます。舞台芸術科(仮称)設置検討の背景ですが、先程教育長からお話させていただいたのと少し重複いたしますが、御説明をさせていただきます。演劇の教育効果という部分でございますが、参考資料1を併せて御覧ください。文部科学省のコミュニケーション教育推進会議という平成23年のものですが、この推進会議の審議経過報告の中で、演劇によるコミュニケーション能力の育成効果は広く認められていると記載されています。参考資料1を御覧頂きますと、コミュニケーション能力が求められる背景から始まって、コミュニケーション能力を育成する手法・方策が書いてございます。コミュニケーション能力の育成にあたって、演劇を通じて育成をしていくという意味では、平成23年あたりからも文部科学省においても幅広く議論されているということがおわかりいただけるかと思います。(2) 県立高校における演劇関連科目の設定状況でございますが、これから専門学科を作ろうということで検討しているところですが、科目という意味では、単位制普通科の学校が多くなりますが、平成29年度現在、トータルで15校、演劇関連の科目を設定して科目として演劇を扱っている学校がございます。こうした学校で、演劇関連科目を置いている目的といたしましては、自主性、協調性の育成、コミュニケーション能力の育成が主な目標として掲げられています。次に(3)の県立高校改革との関係でございますが、平成27年に県立高校改革基本計画の中で、社会状況や産業動向に対応した専門教育の充実の中に、社会のニーズ等を踏まえて新たな専門学科等の検討と設置が必要であると謳っておりまして、その中の1つに舞台芸術を位置づけているということがございます。そして、その下には、繰り返しになりますけれども、コミュニケーション能力の育成に取り組むということも、記載しております。こうしたことを受けまして、平成28年1月に県立高校改革実施計画を策定させていただいておりますけれども、その中で、専門学科の新設ということで、実施計画(I期)の中では学科改編や学科の新設に既に取り組んでおりまして、芸術に関する学科としては、音楽に関する学科と美術に関する学科を既に位置づけさせていただいております。そういった意味で、舞台芸術については、I期計画の中では位置づけられていないという状況でございます。直近の国

の動向でございますが、これも教育長から先程お話をさせていただいておりますが、国の第3期教育振興基本計画の中で基本的な考え方を策定するにあたって、文化・芸術に秀でた人材の育成が位置づけられてございます。そのことにつきましては、参考資料2を併せて御覧いただきますと、裏面にスポーツや文化芸術に秀でた人材の育成が必要であるということで、これから東京オリンピック・パラリンピックが開催されますが、その大会に向けて、あるいはその後を見据えて技術革新やグローバル化にも対応する社会の持続的な発展といった観点から人材育成が必要だということとあわせて記載されているということでございます。資料2に戻らせていただきますが、設置の目的ということで記載させていただいておりますが、グローバル社会を見据え、幅広く芸術文化の発展を担う、人間性、創造性豊かな人材を育成するために、舞台芸術科、仮称ですけれども、設置をしたいということが目的でございます。設置の検討にあたって、事前に中学生のアンケートを実施しております。そのアンケートの結果を参考資料3として御用意をさせていただいておりますのでご覧ください。この参考資料3ですが、本日は御欠席ですが中学校文化連盟演劇部会の稲童丸先生にご協力をいただき、今年の8月2日から4日に青少年センターで開催されました、中学創作劇発表会においてアンケートを実施させていただいております。330名の生徒さんにご協力をいただきました。簡単に説明をさせていただきますが、ご自身のことについて伺ったところ主に中学1・2年生でございました。それからお住まいの地域、演劇部に入部した理由、劇の発表会でございましたので、ほぼこの場に参加していた生徒さんは演劇部の生徒さんでございます。演劇部に入部した理由なども伺わせていただきました。その上で、裏面に移らせていただきますが、(4)で演劇部の活動を通じて成長したこと、学んだことを聞いております。その中で多かったのは、人前に立って話や表現をすること、自分の考え、思いを伝えること、他人と話し合い、考えをまとめること、文章を読むこと、周囲の人と協力すること、といった回答を頂きました。(5)として高校でも演劇を続けたいと思っておりますかという質問に対しては、続けたいと回答した生徒さんが約半数の52%でございました。(6)として、専門的にダンス、ミュージカルなどを学ぶことのできる学校への進学を考えたことがあるかという質問に対しては、考えたことがあるとお答えいただいた生徒さんが119名、約36%いたという状況でございます。(7)として、高校に演劇を学ぶことのできる学科やコースがあったら進学したいと思っておりますかという問に対しては、そう思うと明確にお答えいただいた生徒さんが64名、多少そう思うという生徒さんが109名、合わせますと半数を超える生徒さんが多少なりとも進学したいと思っております。このこととあわせてでございます。(8)として、将来、演劇やダンスなどに関する職業に就きたいと思っておりますかという問に対しては、思っているとお答えいただいたのが69名、多少思っているが72名でございますので、パーセンテージにしますと両方で約43%となっております。また、(8)に関連して、思っていると回答した場合に、具体的な職業をイメージできているかお聞きしたところ、俳優ですとかミュージカル俳優、ダンサーとご回答された方もいらっしゃいましたし、演出、照明、音声、脚本などに就きたいとお答えい

ただいた生徒さんもいらっしゃいました。なお、その他が 23 名いらっしゃいますが、そのうちの 17 名は声優と回答しております。以上が中学生にアンケートを採らせていただいた結果でございます。アンケートを採った生徒さんは、演劇部の生徒さんでしたので、それなりに演劇に対して思い入れ等がある生徒さんではございますけれども、演劇部に入っていないなくても、演劇活動をしたいと思っている生徒さんは当然いるかと思っておりますので、神奈川県内での一定程度のニーズはあるというふうに私共としては捉えております。それでは、また資料の 2 に戻っていただきまして、裏面の 3 でございますけれども、舞台芸術科（仮称）の設置に向けた検討事項ですが、こちらに記載してございますように、基本コンセプト、教育内容、施設整備、指導者の確保、その他ということで例えば入学者選抜をどうしていくのかといったようなことも含めて基本的なことについて御検討をいただきたいと思っております。駆け足ではございますけれども、最初の検討事項について、説明をさせていただきました。

会長（能祖構成員）

今、御説明のありました、「舞台芸術科（仮称）の設置に向けた検討事項について」何か質問のある場合はお受けしたいと思います、いかがでしょうか。

会長（能祖構成員）

よろしいでしょうか。それでは、最後にお話のあった検討事項の中の（1）基本コンセプトについて協議をしたいと思っております。それでは、基本コンセプトについて事務局から説明をお願いします。

（事務局）

それでは、資料 3 を御覧いただきたいと思っております。資料の 3 に舞台芸術科（仮称）の基本コンセプト（たたき台）というものを事務局で用意をさせていただきました。これは、他県で実際に専門学科として舞台芸術関連の学科を既に設置している県の様子なども見させていただきながら、7 つの項目を挙げさせていただいておりますので、御議論いただければと思っております。少し読ませていただきますと、（1）舞台芸術との出会いの場（本物の芸術との出会い）というのを大切にしていきたいということで 1 つ挙げさせていただいております。それから（2）演劇、舞台技術等の理論から実践までの指導を通じた舞台芸術の幅広い教育、（3）舞台芸術を通じた、様々な芸術を理解する、幅広い教養を身につけた人材の育成、それから（4）複数の人間で協力して 1 つの作品を作りあげる演劇活動を通じたコミュニケーション能力の育成、（5）将来の演技者等の専門家のみならず、多様な進路に対応した教育課程、それから（6）KAAT、青少年センター等の外部機関との連携による多様な学習機会の提供、そして（7）舞台芸術科（仮称）での学びによる教育効果の県立高校全体への普及、というようなことをたたき台として、御用意をさせていただいております。なお、細かい説明は省略をさせていただきたいと思っておりますが、参考資料

4として、他の都府県の舞台芸術関連学科の設置状況を一覧にしております。7校ございまして、青森、埼玉、東京、石川、大阪、大阪は2校ございまして、そして兵庫ということで、こうした都府県で舞台芸術に関連する学科を設置してございまして、どの学校も設置学級数は1学級でございます。名称につきましては、色々な名称を専門学科として、使われているようでございます。それから、参考といたしまして右側に、例えば普通科との併置の学校ですとか、埼玉県などは映像芸術科、美術科、音楽科との併置、というような形で記載をさせていただいております。説明は以上でございます。

会長（能祖構成員）

はい、ありがとうございます。それでは、「舞台芸術科（仮称）の基本コンセプト（たたき台）」に関しまして、御質問がある方はいらっしゃいますか。

（堀江構成員）

青少年センターの堀江です。舞台芸術というのはどのジャンルまで含むのかというのは、ここでは議論は必要ないのかどうか、ということをお聞きしたいと思えます。何故かという、他県の例を拝見したのですが、ダンス、コンテポラリーダンス、それから演劇というのがあったのですが、どこまで含むのか、場合によってはクラシックバレエもやっているところもあるのですけれども、どこまでを我々が対象とすべきなのか、県立高校としてどこまで対象とすべきなのか、どこかで、他のところで議論する予定なのであるか、ということも含め事務局にお伺いいたします。

（事務局）

舞台芸術というと、かなり幅広い分野になるのかなと思っています。例えば、埼玉県では、1つの学科の中でコンテポラリーダンスも含めて色々な分野を実際に学んで、その後それぞれがどういう進路に進みたいのかというのを生徒さんは選んでいらっしゃるかと思いますので、最初は、少し幅広く考えていただいて、生徒が成長するにあたって、どういった分野まで学んでいくのがその後の将来を決めるにあたって参考になっていくのかという点も含めて、広く浅く学んだほうがより生徒にとって有意義ではないかという議論もあろうかと思いますし、最初からある程度絞り込んで学ばせた方が生徒にとってその先を決めやすいとか、そういうことも含めてどこまで学ぶのが生徒にとって良いのかということを含めて、御議論いただくとありがたいと私共としては思っております。

（久我構成員）

私は事務局に近いような立場なので補足をさせていただきますと、埼玉県とか東京都は総合芸術という形で、舞台表現の他に、美術、音楽、あるいは埼玉県は映像芸術なども学科として一緒に設けています。現実的なこととお話させていただきますと、埼玉県や東京都のように総合的な芸術の学校を1つ作るというのは、色々な

意味で余裕が無くて、おそらく1つの学科を作るというような形に現実的にはならざるを得ないと思っています。その中で舞台芸術に関する学科をどこまで広げていくのか、将来どういう子ども達に育てたいのか、というところから考えて、ある程度幅広に議論していただきながら、その中でこういうことは学んだほうが良いというのを絞り込みながら、1つの学科のコンセプトを作っていければなというふうに考えています。

会長（能祖構成員）

その議論の場は、今日やるべきなのか、後日またなのか、どういうふうになりますか。

（事務局）

今、ここで皆さんに御意見をいただいて、この後、教育内容について、実際に検討していきます。ただ、教育内容ということになりますと、例えば科目ですとか、どういった教科を用意したら良いかという、少し専門的な議論になっていきますので、ここでもし可能であれば、例えば先程お話があったように、コンテンポラリーダンスですとか、モダンダンスですとか、あるいはもう少し古典芸能みたいなものも学んだほうが良いのではないかと、色々御意見をいただければ、そういったことを踏まえてその後教育内容の検討に我々としてはあたっていければと思っています。

会長（能祖構成員）

わかりました。では、まず今日はそこからよろしいですか。

（出席者一同、了承）

皆さんに今更御説明するまでもないですけれども、舞台芸術といわれているジャンルの中の一番大きな部分は、大きく括ると、演劇とダンスですよね。それ以外に、落語など、いわゆる演芸といわれるものだとか、あるいは舞踏というのはダンスの中に入れるか入れないかとかありますけれども。ただ、主流というか、メインストリートとしては、演劇とダンス。ただ、演劇といっても相当広いですし、古典、歌舞伎も含め、古典的なものもあれば、現代演劇、あるいはミュージカルなど様々、ダンスに関しても、クラシックバレエ、コンテンポラリー、ヒップホップ、日本舞踊、民族ダンスと色々ありますよね。その中で、どこまでをフォローしていくか、あるいはどこに力を入れていくかということだと思いますが、演劇は、おそらく皆さん割と考えやすいのかなと思っています、僕はもう現代演劇だと思い込んでいたんですけれども。現代演劇を中心にしながら、必要に応じて古典芸能、歌舞伎、狂言とかを入れていく。必要があれば、あるいは教養として入れていくというのはありなのかどうなのか。それからダンスはどこをメインにするかで少し考えが変わるかな、色々あるかなと思うんですけれども。ちなみに私共桜美林大学の場合は、演劇

は現代演劇、どちらかという、今もう流行りませんけれども小劇場といわれている、小劇場とは謳っていませんけれども、小劇場演劇を中心とした現代演劇、それから、ダンスはコンテンポラリーダンスを中心に、クラシック、日本舞踊、それから京劇とって中国の古典演劇というのがあるのですけれども、そういったものを含めて幅広くやっているのが現状なのですね。ただ、先程中学生のアンケートのところでも出てきましたけれども、中学生、高校生もそうなのですが、うちに来る学生などを見ている、声優になりたいというのはかなり、それから俳優といっても映像の俳優だったり、それからミュージカルの俳優だったりするというのが、結構、現実としては多いかな。それが学びの場で、だんだんちょっと違うかなと思い始めて、というところもあるのですけれども、では果たして高校生を対象にした時に、どこにニーズがあって、どこに力点を置いていくかということだと思えるのですけれども。荒木さん、いかがでしょうか。

(荒木構成員)

我々生徒を預かる学校の立場としては、出口というのが一番気になる中で、専門の方がたくさんいらっしゃる中で大変申し上げにくいのですが、教えに来てくださっている方の話を聞くと、食えない世界だからねというところがあって、私の感覚では専門学科を作るのであれば、その専門学科の先にはある程度将来に繋がる道があって、出口がなければいけないのかなという中で、このコンセプトの中でも、多様な進路に対応した教育課程というのがあるのですけれども、生徒のニーズがどこにあつてということも大事ですけれども、その先にどこを出口として考えていくのかということも、是非視点として持っていただくとありがたいのかなと思っています。本校に来ていらっしゃる講師の方等のお話を伺っていると、やっぱりそのままの道にストレートに進んでいる方は少なく、3分の1ぐらいいけば良い方なのかな、そのへんが少し心配かなという気持ちがあります。

会長（能祖構成員）

ありがとうございます。川端さん、いかがでしょうか。

(川端構成員)

私の感覚では、映像はちょっと違うのかなというふうに、最初から映像はイメージしていませんでしたし、コミュニケーション重視というところからいくのであれば、それを除いたものというふうに捉えています。そして、ダンスにつきましても、舞台上で身体を使って表現するものの1つ、あるいは基本というふうに捉えていますので、日本舞踊やコンテンポラリーの身体の使い方を演劇の中で使っていくというふうに捉えておりますので、一緒にして舞台芸術として考えていくことができるというふうに考えております。

会長（能祖構成員）

ありがとうございます。眞野さん、いかがでしょうか。

（眞野構成員）

先程、おっしゃっていたように出口がすごく大事な問題だとは思いますが、ただ中学3年生が高校を1年、15歳ですよ、まだ。15歳の子どもが自分の将来をそこで決めるというのは非常に難しいことだと思うのですね。大阪市立咲くやこの花高校の教育課程を見ていると、4分の1程度が基本的に専門教育にあてられており、それ以外は数Ⅱまでやっていますよね。そして英語がものすごく重要視されていて、正しいやり方だなどと思っているのですね。演劇をやるためには、まず台本を読まなければなりません。台本を読むというのは、国語力、日本語を読む力をそこで学ぶことでもある。川端さんもおっしゃったように、映像はこのカテゴリーに入らないのではないかとこのふうにおっしゃいましたが、実は、演劇と映画とは基本的に競いあうように展開してきたのです。日本の映画が衰弱したのと、日本の演劇が衰弱していくのと、ほとんど同時期なのです。ちょっと日本の映画が上向きかけた、または、ATGというのがありましたね。ATGで、ヌーヴェルヴァーグの日本版みたいな人たちが山のように出てきた。それから日活のロマンポルノなんかでも良い監督がいっぱい出てきた。その時に、日本の演劇が一時力を持ち返した。だから、子どもたちには映像の勉強はさせなくても良いけど、いっぱい映画を見させるみたいなことも、なんとなく教育の中で、頭の中で置いておくのが良いかな。演劇の表現というのは、今、カテゴライズするのが非常に難しく、演劇にも映像的な感覚を持った脚本家がいったり、まず絵コンテで台本をこしらえてそこから文字に起こすような脚本家がいったり、現場で色々な若い方が、30代から40代の演出家や脚本家の作品をみておきますと、映画と同じように、アップしたり、引いて撮ったり、ワイプをしたり、色々な映像的手法がものすごく入っているのですね。こういう手法は色々な芸術的関心を、それはオペラから民俗芸能に至るまで、おそらく多様な関心を持っているから、こういうふうなことができるのだらうと思うので、できれば短期間でも良いですから、そういうふうな芸術の幅の広さをカリキュラムの中に是非入れてもらいたいなど思っている。そういうふうなコンセプトで、演劇というか表現全体を、基本的に、総合的に、表現という言葉がどこかで引っかかるものに関しては、過不足なく触れさせるべきだらうなど、個人的には思いますが。なかなか難しいことだらうとは思っています。これだけ勉強して、尚且つやらせるというのは。でも、子どもたち忙しいとは思いますが、今、演劇は表現するのが難しいと能祖さんおっしゃったように、本当に毎年毎年演劇と称するものの中身が少しずつ変わるのである。行きつ戻りつしながら、やっぱりずうっと変化していくものなのです。ですから、その変化そのものを上手く受け入れる能力、そういう能力もここでは皆さんと一緒にどうすればそういう力が付くのかなということを、15、16、17、18歳の子どもたちですから、子どもから大人になる間ですから、どういうふうに教えていけば良いのか難しいですが、何とか、本当に多様な力を、この学科がもし新設さ

れてこの学科に入った子どもたちが身に付けられるようにするには、気が遠くなるような話だなと、個人的にはね、本当に思います。

会長（能祖構成員）

堀江さん、いかがでしょうか。

（堀江構成員）

出口でプロとして成功するような人材をとということであれば、KAAT であるいは商業的に何がヒットしているかということから逆算していけば良いと思います。そうではなくて、先程御説明があったように、人間性、創造性豊かな人間を育成するため幅広く考えるのであれば、また、俳優としてだけではなくて、舞台裏、あるいはそこに至る色々な調整をしたり、幅広く物事を考えられる、あるいは色々な人を尊重するような子どもたちを育てたいということであれば、演劇を軸にするのはやはり素晴らしいことだと思う。青少年センターの経験だけから申し上げますと、やはりどうしても演劇が中心になっておりまして、小学校、中学校、高校の演劇だけで年間 30 何日上演がある。先程の中学の創作劇発表会、1,532 人来たうちのアンケート結果が先程示されたと思うのですが、それに対してダンスは3日間だけなのです。それぐらいの広がりの違いは感じられます。それからもう1つ、青少年センターでは、引きこもり、不登校、非行とか、そういう問題を抱える子どもたちの相談・支援の窓口、これも1つ大きな役割としてございまして、こちらの面から申し上げますと、家庭とか地域の力が衰えている中で、そういう子どもたちの能力をしっかり見ることが社会に弱まっていると感じていまして、例えば先程声優という希望が多くありましたが、声優は表現したいけど人の前に出る必要がないのです。そういう大きな違いがあります。人の前に出るって非常に怖い、でも何かしたい、というのが声優志望というのに現れている気がします。その中で演劇がどうしてもメインになってくるのは、やはりただ単に台詞を言い合ったりするのではなくて、相手がどう受け取って、相手がどう反応するか、それがあって初めて演劇というのは成立するわけで、それがゆえに人の言うことをよく聞く、人がどういうふうに表示をするかというのを聞く能力も当然それに伴って培われる。あるいは、一般社会の中ではあまり褒められないようないろいろな能力も場合によっては演劇の中では出てきたりしますし、あるいは、単なる通行人の役でも非常に重要な役割を果たしているということに着目する。ということを見ると、演劇というのは子どもが他者を尊重する心を培うために素晴らしいツールであるかなというふうに考えられますので、どうしても演劇が中心になってくる。それにどうやって豊かなものを付け加えるか、先程眞野さんがおっしゃったように、例えば伝統芸能の所作を身に付けることでより幅が広がるとか、ダンスによって身体表現をそれに付け加えてより広げるということ考えられますので、演劇を軸にするということには私は賛成ですし、青少年センターでの経験からすると、社会もそれを求めているのではないかというふうに思います。

会長（能祖構成員）

わかりました。田中さん、いかがでしょうか。

（田中構成員）

表現のジャンルは一定の幅、やはりいくつもあったほうが良いと思います。2点からです。1点目は、先程眞野さんが言われたように、15歳で1つに絞り込める子は少ない、限られていると思いますから、ある程度の幅が必要。2点目は、素人ですけれども、歌う力、踊る力、演じる力、語る力、色々な力の相乗効果で舞台芸術、演じる者の力が付くと思うので、この2点から一定の幅が必要だと思いますけれど、そこから制約をつけていくのはハード面で機器、設備でできること、できないこと。次はソフト面で、学科をつくる以上は単年度ではいけないわけですから指導者が確保できるかというソフト面での制約もあると思いますから、その2点の制約で、ある程度の幅を考えてからそこで制約をしていって、ジャンルを決めていくといふうになるかなと思います。

会長（能祖構成員）

はい、ありがとうございます。久我さん、いかがでしょうか。

（久我構成員）

資料にも書いてあるように、これから好むと好まざるとに関わらずグローバル社会がどんどん広がっていきますから、日本にいても外国の方と接して自分の言葉で表現をする力っていうのが必要になってくると思います。そういう意味では、演劇は教育の中でも既に実践されていますし、教育には非常に効果があるといわれていますから、演劇を中心に考えるというふうに事務局としてもそんなイメージをずっと持っていました。ダンサーというのは、特殊な別の経験とか訓練を積んでいかなないと難しいのかなということがあります。これは県立高校で舞台芸術科をつくるということですから、決してここでプロを育てようというような目的ではありませんので、ここから先にどういう進路に行くのか。ここで学んだことをベースにして専門的に更に研究とか勉強していくという方もいらっしゃると思いますし、それはそれで、そういうことができるような教育を授けてあげるといのは当然必要だと思います。そうではなくて自分は銀行員になりたいとか、商社マンになりたいとか、世界に出ていって活躍するときにここで身に付けた力が発揮できるようなそういうベースの力をここで付けさせてあげるために何をやらいいのかなというふうに思っていて、そういう意味で幅広く芸術的なセンスとか、教養を学んでおく、自分の表現力を磨いておく、ということができるといのは、たぶん演劇をベースにしたほうがやりやすいのかなというふうには思っています。

会長（能祖構成員）

はい、ありがとうございます。センスというのは確かにそうですね。

(堀江構成員)

秋田県にわらび座という劇団があって、そこで劇場を持っているのですが、その社長いわく劇団では儲かっておりまへんと。3つの柱があって、1つは、地ビールをつくっています。1つは温泉です。もう1つは企業研修だというのですね。何故かという、子どもも預かるのですが、営業の方々を預かって、表現力を身に付けさせるという研修があるのだそうです。その社長の信念としては、営業というのはその気になってない相手をその気にさせると、これは演劇の技術の応用でできるのだと、これだとビジネスになるのですよとおっしゃってまして、実社会でも演劇の能力というのは色々な面で、役に立つというふうに、つまり、それがビジネスとして成り立っているということは、実践的な力もあるんじゃないかなというふうに私は思っています。

会長（能祖構成員）

はい、ありがとうございます。今、基本コンセプトに先立ちなのかな、ジャンルをどうしようかというところを議論させていただいたのですが、概ね、皆さんの御意見を伺っていると、演劇、現代演劇ですよね、現代演劇というのが中心になってくるのであろうと。現代演劇も現代演劇としていきなり出てきたわけではなく、あとは私たちの日本人としてのアイデンティティ等もあるでしょうから、古典芸能、日本の古典芸能、あるいはこれから先の表現に向かってというところも視野には入れるべきであろう。それからダンスに関していうと演劇とイーブンではなく、ダンス表現も触るのですが、比重としては演劇を中心に、ダンスと演劇が、今、ボーダレスのところも結構ありますからね。いずれにしてもダンスは触っておいた方が良い。触り方はちょっとわかりませんが。演劇中心の中でダンスも触っていく。また実際的に高校から始めていくということであればコンテンポラリーダンスかと思う。クラシックバレエは3、4歳からということもあるし、そういう子は皆教室に行ってますから。ダンス団に入ったり。そこから始める子がいても良いのですが、コンテンポラリーダンスは大学から始める子も多いので、それでそのままプロになる子もいますからね。コンテンポラリーダンスというのが現実的には染まりやすいのかなと思いますけれども。それから出口の問題は、とにかくまだ中学生であるということで、次の進路としての高校を見据えながら。それからもちろんそこからプロになるということがもちろんあっていいし、それから一般企業に入っても磨かれた芸術的センスであるとか、コミュニケーション能力であるとか、そういったものをいかして社会の役に立つような人材を育てていく。それはジャンルということにさせていただいて、大元の基本コンセプトに戻るんですけども、本日御欠席の稲童丸先生から御意見をいただいているみたいなので、先に御紹介いただいてもいいですか。

(事務局)

本日御欠席の稲童丸先生には事前に資料をお見せして、御意見を伺っております。

コンセプトを御覧になって、このコンセプトがベースになるのではないかとということで概ね御了解いただいたということがまず1点ございますが、1番目の本物の芸術との出会いというのが結構大事だということをおっしゃっておりまして、稲童丸先生は演劇も含めて本物を高校生に見せていくということが大事だということと併せて、その中で可能であれば、例えば校外学習で本物の舞台の本番ではなくて稽古を見ると全然違うのではないかとということをおっしゃっていました。何故かという先生は、様々な役割の方が、1つの舞台を作り上げていくという過程を見せることで、どんな役割をしているのか見るのが大事なのではないかとということをおっしゃっていました。そういったことを校外学習などを通じて経験できると良いのではないかとというようなことをコンセプトの(1)と絡めてお話をされていたということと、先程来お話が出ているように、進路については、様々な進む道があるので、少し幅広く進路について対応できるようにする必要があるというようなことをおっしゃっていました。中学校でも、創作劇などを奨励しているそうでございますが、例えば演じるということではなくて、作品を書くということに喜びを見出す生徒さんもいるので、そういった生徒さんのニーズも考えてあげると良いかなと。また、演者は、中学生でもプレゼンテーション能力が非常に高く、その能力というのは、先程もお話が出ていましたが、色々な部分で社会に出たときに役立つということで、企業でもプレゼンテーション能力というのは当然役に立っていくのではないかとということで、そういったお話もされておりました。それから、コミュニケーション能力というのは、演劇を学んでいくことで自然と身につけていくし強化されていくというようなこともお話をされておりまして、この新しく設置される専門学科での取り組みが他の学校にも、その良いところを普及していければ、県立高校全体のコミュニケーション能力の育成にも役立つのではないかとということで(7)の全体への普及というところに絡めて御意見を頂いているところでございます。あとは一方、先程もお話出ていましたが、指導者の確保というのは大きな課題になるだろうなということで教員だけではなかなか対応できませんので、外部人材を活用していく必要があるということでもございました。

会長（能祖構成員）

基本コンセプト（たたき台）に7つまであって、ここに書いてあることは確かにそうだよなということだと思っておりますが、ここに書いてある以外のことで、これもコンセプトに入れたほうが良いのではないかと、あるいはこの(1)～(7)のうち特にこれに関してはもうちょっとこういうことも付け加えたほうが良いのではないかと、もちろんこの7つのうちのこれはいらないということがあっても良いのですが、どうでしょうか。

（眞野構成員）

(6) なんですけれど、大学というのを特記的に入れたほうが良いのではないで

しょうか。大学等の外部機関と。そうするとその大学の4年生や大学院生が実習で高校生と触れ合うような機会を作るというのもとても魅力的な話だなというふうに思うのです。例えば、桜美林大学の大学に残って勉強しようとする生徒さんだったら、現場力が付くし。それから最近の中学生はすごく忙しい、高校生もすごく忙しくて、私たちの主催公演では大概20枚くらい1,000円というチケットを用意しているのです。これが売れ残っちゃう。やっぱり6時半とか7時の公演だと学校での部活動として見に来るみたいなのは難しいのかもしれないし、学校の勉強が忙しくてなかなか来れないのかもしれないし。いっぱい若い子に見て欲しいなという芝居で、いっぱい電話を掛けまくったり、チラシを高校に全部送っているんですよ。演劇部様ということで送らせていただいているのですが、そういう意味では機会は、これからもこういう場を通じて是非高校生に部活動でもいいし、それ以外の全部の高校生に、演劇という、とても自分や社会を考えるきっかけになるようなものを是非見ていただきたいのですが、なかなか難しくて。これ、800円にしたら来るのかなとか色々と思うのですが。あと、もう1つ、皆さんがたぶんそうだなと頷かれていた、劇場の中でモノがつくられていく過程そのものを、全部を体験させる。例えば40日間その生徒さんを、全部が関連してますから一部分だけ見せても、あるいは一週間ごとに見せても、あまりそのへんのところがなかなか伝わりにくいと思うんです。僕らもその必要性をすごく感じているので、もしこのコンセプトの中でこれから先、中身を整理していくにあたって、私たちもできるだけ考えたいと思いますので、例えば舞台稽古に入ってから一週間、例えば朝の10時から夕方5時まで一週間、カリキュラムが許すならば本番の日まで、一週間張り付けてくださいよって。そうすると様々な役割が、一週間のうちに全部出てきますから。これだけたくさん人間がたった3人しか出ない芝居に裏側で30人も動いているっていうのが、すぐわかりますので。演出家が、どのようにその人たちとコミュニケーションをとっているのか、それから役者たちが裏で支えている人間たちとどういうふうにコミュニケーションをとっているのか。本当に具体的に見てもらえば、いつもそういう機会がないかなと思っているのですが、夏休みしかないのですよね。それを経験した生徒さんは学校へ帰ると見違えるようになると思うのですね。毎回夏休みに機会を作ろうとするのですが、うちも夏休みはオリジナルの子どものお芝居を毎年作っていますので、稽古場に生徒さんが30人もずっと見ているというのも難しい部分がありますし、何か良い方法があると思うので、このへんのところも一緒に考えていければ良いなと思います。

会長（能祖構成員）

はい。大学というのはなるほどと思いました。おもしろいですよね。大学に対しても。高校生も先がこういうふうになっていくのかというのが見えてくるかもしれないし。他に何かございますか。

(久我構成員)

大学を入れたらっていうお話ありましたが、今、そういう議論をしているところでして、学校だけで全てが解決できない、全てが自前主義で、自分たちだけで教育することができない時代になった。だから、外部の人材とか、資源とか色々なものを活用して、高校教育の中にも取り入れていきたいと思いますというふうに取り組んでいるところなので、もし、そういった形で色々なところの機関と連携をしながら、あるいは、力を頂きながら進めていければ良いなというのと、演劇関係は特にそうだと思いますので、まさにこういう部分を進めていっていただければなというふうに思います。

(眞野構成員)

この基本コンセプトは、それこそ基本的で、かなり網羅的で横断的で、このコンセプトに沿って、このコンセプトを深めていけば良いだろうなというふうに思うのです。ただ、久我さんがおっしゃったように、この学科を出たから次に芸術系の大学、芸術系の専門学校、芸術系の職業に就くとは限らないということは、とっても大事なことだと思うのです。そういう意味では、神奈川県、特に横浜市、川崎市あたりは、それから厚木市なんかもそうかと思いますが、外国の方がたくさん住んでいらっしゃる。その方々とこれからどういうふうに共生していくのかということ、仮に言えば、テネシー・ウィリアムズを一発やってみればそれでわかるじゃないかと。そこにはプロホワイトも出てくるし、黒人もでてくる。クレオールも出てくるし、色々な社会的な差別や、社会的な矛盾やそういうのもそこに全部入っている。それは社会で教えることでもあるし、政治経済、地理もありますよね。そういうことで世界を知ること。それから表現として英語を使う、これは日本はかなり出遅れていますよ。英語でニュアンスあるコミュニケーションができるという教育が大学でもなされていないのですよね。今、KAAT なんかではまず雇うときに英語をしゃべれるか君はというのをまず聞くのですよ。私、昔演劇の会社をやっていたのですが、そこは英語をしゃべれないと入れなかったのです。一方的に入超なので、演劇の作品は。今、ミュージカルの作品だろうが演劇だろうが、向こうから来る数と日本から出て行く数でいうと圧倒的に向こうからの入超なのです。私たち何故外国に出て行けないかという、共通語である英語みたいなものが喋れないからというのは大きいと思うのですよ。中国と仕事をするとき共通語は英語なのです。お隣の韓国と仕事をするときも公文書は英語でやり取りをするのです。そういう意味で演劇の世界は全部英語になってしまいましたから、もちろんヨーロッパも英語でやり取りするようになるので、それは外に出ても同じことだろうと思いますので、そういうことをいうと、本当に多様な教育をそれぞれに充実させるとおのずと演劇ができる。国語もそうですし、歴史や政治経済、倫理。そういったものが全部演劇と関係してくるので、先生方が意識していただければ、舞台芸術科はたぶん内部的にも人材が確保できるようになるかもしれません。高校の先生が、実はコミュニケーション能力を教えているのだ、政治経済で、とちょっとと思うことで、神奈川県の先生の

10分の1でも思ってくれば、その先生が教えれば舞台芸術科は十分に成立すると思います。

会長（能祖構成員）

ありがとうございました。はい、どうぞ。

（川端構成員）

（4）ですが、さらっとコミュニケーション能力と書くのはもったいないくらい、これは私が本当に短い間ですが演劇の顧問であった時の生徒たちの様子は、まさに先程のコミュニケーション推進会議の1（4）コミュニケーション能力の捉え方の中の意見を戦わせる場。これは本当に指導力のある舞台監督さんが全部指示してしまえば、はいといってそのとおりに演技するしかないのですけれども、一顧問で生徒たちに演劇を作らせているときは、本当に私は興味深いと思って見えています。真っ赤になって議論を戦わせますよ。それぞれ感性違いますし、思っているものも違いますので。それから、本を読んだときの感じ方が違うのですが、他の生徒たち、高校生を見ていて、喧嘩をしたり、議論を戦わせるというところは、まず見ません。なんとなく、そうだよくらいところで妥協するのですけれども、演劇を作ろうとしているときの子どもたちは真っ赤になってああでもない、こうでもないというのをやるので、私は途中でさっと引いて様子を見てるとなんとなく最終的に形ができてくるというのを生徒たちが部活動ではもちろん、部活動だと本当に短い時間で、なかなか見られませんけれど、高校生の時にそういうことを体験させるというのは色々な意味で、コミュニケーションの色々な意味の中で、非常に大事だと思っています。ディベートとかとはまた違う、本当に自分の思いを、芝居を完成させなければいけないという課題を前にして、じゃあどこで、妥協というのはよろしくないですが、意見を取り入れながらっていうところは、まさに作り上げる中で学び取っていくことで、将来的にも非常に大事なものだというふうに感じています。

（眞野構成員）

川端さんのおっしゃるとおり、青少年センターでの発表の場もそうなのですけれども、もっと子どもたちに時間を与えてあげたいなと思う。公演をする時、例えば、1時間の時間で30分の芝居の準備をしろみたいなことでしか今成り立ってないわけなのです。それもそれを進行させるための専門家が指図するわけですね。子どもたちに考える時間、あるいは、子どもたち同士で議論する時間などが、全く設けられないで機械的に公演するのが目的になってしまう。そのためには、前の青少年センターの館長、現在うちの専務ですが、に意見を聞かれたので、今たった5日、6日でやっているけど、ひと月かけてやるのだよ、子どもたちにもっと騒がせなければいけないって、私言ったのですけどね、なかなかそれが実現しなくて。川端さんがおっしゃったような子どもたちの議論が過程的に起こるし、それが結果を出すときはもっと激しく起こる。色々なプロが一緒についてないと駄目ですが、子どもた

ちに表現を人に見せるというレベルになったときには、もっと時間を与えると良いだろうなと思ったりもしますね。

(堀江構成員)

質問なのですが、いま川端さんがおっしゃったコミュニケーションという言葉の意味なのですが、基本コンセプトの(4)で取り上げられているのは、どちらかというと企画とか調整とか、そういう場面におけるコミュニケーション能力ですよ。つまり、何が言いたいかという、先程久我さんがおっしゃったグローバル社会を見据えて人間の創造性とかいうことを考えたときに、プレゼンテーション能力に通じるようなコミュニケーション能力、つまり、自己表現を通じたコミュニケーション、まさに演劇そのものを通じたコミュニケーション能力のことをここで言っているのか、それとも、共同作業をやることにおけるコミュニケーション能力、それも大事なんですけども、この基本コンセプトで言っているのは後者だとすると、前者、つまり久我さんがおっしゃったようなコミュニケーション能力というのどこか基本コンセプトに書いておく必要があるのかな。

(久我構成員)

ちょっと狭い限定したようなコミュニケーション能力というふうに受け取られかねない、というようなご指摘なのかなと。そうじゃない、異文化も理解しながら他者と協働して何かができる、それで自己表現ができるというちょっと広い意味でのコミュニケーション能力。私が言ったコミュニケーション能力というのはそういった意味合いで、ここもそんなに限定しているつもりはないと思います。

(眞野構成員)

あまりに幅が広くてこういうふうにしかならなかったというのが私の理解ですが。

(堀江構成員)

もう1つ高いようなものを出しても。

(久我構成員)

もう少しわかるような形で表現したほうが良いだろうというようなご指摘ですかね。

会長(能祖構成員)

はい。ありがとうございます。ちょっと僕のほうから一点。舞台芸術の、大学生の特に一年生などには、先程ちょっと申し上げたように、映像の俳優になりたいと入ったとか、声優になりたいとみたいな子も入っているのです。大学の中で色々なことに気付いていけば良いと思っていますから。そういう学生に舞台芸術ってなんだろうね、という話をするなかで、一年生の春学期に、色々な言い方をするのですけ

れども、他の芸術にない大きい特徴としては2つあって、1つはみんなで作るということだよねと。つまり個人プレーではない。小説家が一人で小説を書くようなものではなくて、演者もスタッフも含めて色々な人と1つのものを作っていくと。そこにコミュニケーションがどうしても必須になっていくから、演劇をやるにはコミュニケーション能力がおのずからそこに頼っていかざるを得ないし、それを高めていく作業にもなる。だからそれは、演劇が職業にならなくても、一般社会でも十分通用するのだよねということを説明するんですね。それから目の前にお客さんがいるということで、ライブ芸術だということがすごく大事で、よく言われますけれども、時間と場所を共有していくということですね。それが、今のネット社会の中でいつでもどこでも誰とでも繋がれるということの真逆の、今しか、ここでしか、アナタとしか、目の前のアナタとしか繋がれない、という超アナログの表現なのだけれども、じゃあ演劇が潰れるかっていうと絶対潰れないだろう。なぜならば、いつでもどこでも誰とでもつながれるということだと、何かしらがちょっと薄れていく。その薄れていくのは何だろうねといった時に、それは、生きている実感。人と人の絆。どうしても薄れていくので、それを補完する意味で、強める意味で舞台芸術はそこを強めていく。つまり、今生きていて、アナタも生きていて、ということですよ。その部分を、つまり生きている実感みたいなものを何かしらこのコンセプトの中に入れていけるといいかなと思うのですが。今の子どもたちはそこが薄れていますから、すごく。自分が生きている実感を感じる力、あるいはそれを他者と共有できる力。ひいては、それを社会に役立てていく力。演劇を通じて、自分が生きているのだなということを実感する。それから他者とともにそれを共有していく。それからその力を社会に還元していく。地域に還元していく。ということコンセプトの1つにどこかしら入れてもらえると良いかなという気が僕としてはするのですけれども、どうでしょうか。

(久我構成員)

おっしゃるとおりだと思います。私は現場で教育をしているわけではないですけれども、演劇部の生徒たちの実際にやっている姿を見ると、すごく熱く生きているっていう感じがしますね、その場所では。そういう実感というのは確かに薄れているのだろうなと思いますので、今、おっしゃられたようなことをこの中に盛り込んだ形で示すことが出来たら素晴らしいコンセプトになるなというふうに思いました。

(眞野構成員)

僕もそう思います。本当に。

会長 (能祖構成員)

今、僕らが若い頃と違ってなんといってもスマートフォンなのですよ。これが曲者なのですよ。便利な一面。これに対抗できるものとしては、アナログな演劇みたいなものを通じて、対抗っていうかスマートフォンなしではもう生きられない

のですけれども。ほかに何かございますか。あとは生徒を、言い方はちょっとあれなのですけど、釣る意味では声優も映像も実は有効で、彼ら自分でわかっている、どうしても声優になりたいのだけれども声優の根幹はやはり演技力なので舞台演技を学びたいのですとか、自分で言うのですよね。映像にしても、映像の根幹は舞台なので、舞台から入りたいのですということを入試なんかの面接でも彼らが言いますから、そこはたぶん中学生でも将来そういうものになってみたいなどと思っている子も舞台上で、生身で、自分が身体張って演技するということが、その根幹にあるということはわかっているのではないかっていう気がするのですけれども。

(眞野構成員)

色々な意味で自分の進路を自分で選んだ子はそういうことになるのかな。漫然と入ってきていないというところ、そういうふうに意識できる子どもたちを高校3年生の卒業式の日でここで育てていけばいいのですね。

会長（能祖構成員）

高校の3年間ですからね。大学の4年間も長いというか大事な時期ですけれども、高校もやはり相当大事な時期なので。他にございませんようであれば、先へ進めさせていただきます。（3）検討協議会の進め方について事務局から説明をお願いします。

(事務局)

資料の4を御覧いただければと思います。今後の進め方についてでございますけれども、本日、12月26日を第1回にさせていただいておりますので、次回を1月の下旬に、今いただいた御意見も踏まえて、基本コンセプトをもう1回整理をさせていただきたいと思いますが、その前に1月の中旬にワーキンググループということで県立の高校の教員の方にも今回の議論していただいた内容をお伝えして、基本コンセプトについて少し修正を図る作業をさせていただこうかと思っています。併せて、ワーキングの中では少し教育の中身について、先程と同じようにたたき台という形で我々のほうで本日の議論を含めて少し整理をさせていただいて、第3回の2月、一応中旬と置かせていただいておりますけれども、そこで教育の内容について御議論をいただき、3月には今度は施設の整備について、ワーキング、それから、この本会議という形で進めさせていただければと考えております。その後、指導者の確保についてもワーキングの中で議論をさせていただいて、そこで出た意見をまとめて5月には、この本会議に御提示をさせていただき、御議論をいただき、報告書作りをしていきたいなど。これはもう並行してやらせていただきますけれども。5月のワーキングを経て6月に、ワーキングである程度整理したものを事前にお送りさせていただき、確認をさせていただきながら、6月の報告書（案）のまとめということで整理をしていきたいと考えております。大変短い間で恐縮なのですが、円滑に進めていきたいと思っておりますので、宜しく願いいたします。

事務局からの説明は以上です。

会長（能祖構成員）

はい、ありがとうございます。ただいまの説明に御質問、御意見はありますか。

（堀江構成員）

ハードとソフト同時並行で進めていくという感じですかね。

（久我構成員）

ここで基本的な考え方とか姿を議論していただいたら、それに合うような学校はどこかというのを我々としては選んでいく。そこに、これから議論されると思いますけれども、こういう施設が必要で、こういう設備が必要なのだといった時に、そういうものが配置できるような物理的なスペースがあるのかどうか、ということを見ながら学校を決めていくことになります。この中で施設とか整備について議論していただいたことを踏まえて、同時に学校選びを進めていきたいというように思っています。

（堀江構成員）

人という面で言うと、先程ご紹介したような学校演劇発表会には必ず講師というか講評の方がいて、結構毎回お願いしている方もいらっしゃる。学校の演劇に熱心、あるいは理解のある講師の方、そういう方はうちの方でおそらく歴代何十人か揃っていますのでそういう方にあたるということも当然考えられると思う。

（久我構成員）

この場だけではなくて、これ以外の場所でも色々教えていただきながら、そういった人材の方を教えていただいて、我々がアプローチしながら、これから御協力を仰げればと思っています。

会長（能祖構成員）

最初にもお話があったかと思うのですが、演劇といった場合、当然出るほうだけじゃなくて支えるほうというか、スタッフですね、いわゆる、テクニカルも含めて。そういうことも当然入ってくるということですよ。

（久我構成員）

演者だけではなくて、照明、音響といった舞台を支える人たち、演出家も含めて、全部トータルで考えております。

会長（能祖構成員）

一通りできると良いのですよね。それこそ、ちょっとしたものなら書けるし、演

出できるし、出られるし、照明もいじれます、みたいな。それ、すごく大事だと思うのですね、専門性はその先、大学、あるいはその先で深めていけば良いわけであって、演劇的なものの見方とか、考え方とか、それにまつわる先程センスという言葉がありましたけど、それから、本当に基本的なスキルというところを網羅していけると良いのかなという気がするのですけれども。

(荒木構成員)

今、たまたま冬休みを利用して、本校は芸術系の科目で「舞台技術」という短期集中の講座をやっております、たまたまホールがあってホールスタッフというのは全くのボランティアの子たちなのですけれども、この子たちはそういうのが好きなのでそういう科目をとっているのですけれども、2つのグループに分けて半分が演じている間に半分が技術をやる。それを入れ替えてやるのですね。そうすると、普段裏方の子たちが演じるほうに回ったときに、今まで不満に思っていたこと、何でこの時期にそんなことまだ決めてないんだとか、そういうことをですね、この時期に決めるのが無理だって言うことが良くわかりましたとか、発見があったりとかで、やっぱり全体として他のことの経験していくみたいなことは、重要だと思うので、そういった意味からも、幅広いことが出来るような役者になっていったらいいと思います。

会長（能祖構成員）

そうですね。本当におっしゃるとおりだと思います。俳優になるにしても、舞台上でタタけない者は使い物になりませんものね。そういう意味では一通り知ってるよって、できるよって。スキルとしては。あとは視野をちゃんと演劇的にモノを見ていくという視野をもっているという。そこが育成できるといいなと思います。これはちょっと今日の議論ではないと思うのですが、怖いのは、人が怪我したり、最悪死亡したりすることもある現場ですから、その安全管理っていうのは徹底的にやっていないとキツイですよ。

(眞野構成員)

KAATなどで、実習を受け入れられればOKなのですけど。それはここでいけます、といえないのが立場上非常にまずいのですが。そういうところで、本当の専門家が教えるところを見せることが一番早いのですよね。うちも現場で喧嘩なんてしょっちゅうやっていますから。演劇というのは基本的にディベートじゃない折り合いの付け方なのですね。だから共生という言葉に本当に近いと思います。Aという人とBという人は基本的に違うのですよ。Aという人とBという人がそこで出会って、Cをやらなければいけない時に折り合いをつけなければいけないのですよ。その折り合いをつけるときに、相手の言うことをとにかく聞いて自分のことを喋る。自分のことを知ってもらいたければ相手のことを知りたいというふうに思うような子に育てないと、演劇は絶対成り立たない。そういう意味では、言葉も荒くなったりね、本

当に殴りかからんばかりの議論してます。同じですよ、大人になっても。

(久我構成員)

たぶんこれから議論が進んでいく中で、教育課程とか具体的なことを検討していく時に、先程おっしゃられていたような、1週間、2週間、稽古から本番まで見るという時間が取れないかというお話は、もしそれが単位として可能だという話になれば、見て単位が取れますとか、そういう教育課程がもし組めるようであれば、私、教員ではないので分からないですけども、そういうことも考えられるかなとは思いますが、色々と議論の幅がこれから広がるなと思っています。

(眞野構成員)

校長先生は忙しいし、部長、局長あたりも忙しいので、うちにね、一週間だけちょっと席に座ってもらえば、わかると思うんですよ。子どもたちと共有できるものなのか。例えば、荒木さんに一週間うちにきていただいて、うちの芸術監督の作品を今から仕込みますという時から、本番開けますという時まで、ずうっと誰か1人つけますから、裏からどこから、どこでもずうっと好きなどころから見ていただくと、なんとまあというふうに思われると思うので、そういうふうな感覚を全体で、能祖さんは別にして、皆で一回経験しませんか。

(堀江構成員)

私は、それはすごく大事なことだと思う。というのは、今、神奈川県の大きな施設は、ほとんど指定管理に出している。私は、今の副知事の中島さんから言われてはたと気がついたのですけれども、現場を経験したのはおそらく私が最後の世代。県民ホールで現場をやっていて、制作会議から、脚本書きから、舞台監督もやりましたから、そういう何でも屋をやって、ようやくわずかな知識を得たわけで、それはすごく大事で、それはテキストがなくって、見よう見まねで、見て、こういうふうに動いていくのだから、感覚で身に付けるところは大きい、と私自身は感じていまして、まさに一週間べったりそういうのを見ていられたら子どもたちにとってはすごく吸収してもらえないかな、と私は全く眞野さんの意見に賛成です。

(田中構成員)

私は、思うのは、舞台芸術はステージ、ライブで時間と場所を共有する場所で、学校とすごく親和性が高い。私も元教員なのですけど、学校の教員というのは一人芝居の生徒という客のライブなのですよ、全て。時間と場所を常に共有している。本当にライブなのです。ステージでも演者たちが新しい自分を発見するように、学校も新しい自分を発見する場所という意味で、すごく親和性が高いと思うのです。だから舞台芸術科というのは、学校でやっていった時に、教員たちの共感もすごく得られると思うのです。

(眞野構成員)

じゃあ、夢ではないのだ。政治経済の先生が多少、一年に2、3回お芝居観に来てくれて、私たちとお酒を飲む場くらいがあったら、その先生が政治経済を教えるときに少しそこらへんの頭があってくれと。

(田中構成員)

教員は毎日、3ステージ、4ステージ、自分で脚本書いて独演するのですね。毎日4時間くらい独演するわけですから。そういう意味では常に演者なのですね。

(眞野構成員)

僕も大学でね、若いとき、結構呼ばれて、講師であちこちの大学に行くのですよ。20歳くらいの子で、僕らは演劇科というところなので、教えに行くのはね。で、今日はシェイクスピアの話をしてますと。シェイクスピアの何々を読んだことがある人って聞くと、手が挙がらない。手がパラパラとしか挙がらない。この中で、全部シェイクスピアの作品を読んだことがある人、と言うと、誰も手が挙がらない。そこで、シェイクスピアの話はできないな、という、そういうふうな意味で、国語の時間や社会について、先生が毎日ライブやっているのと同じように、そういうふうなことまで手が届くようなカリキュラムを組めたら本当にいいですね。

会長 (能祖構成員)

シェイクスピアについては、大学生でもそうですからね。4年間演劇学びに来たのだよねって、入試の段階ですけど。大学で、経済学部でも法学部でもなく、演劇ってちょっと特殊だと思うのだけど、それを学ぼうと思って君はここにいるのだよねって子に、じゃあ、蜷川幸雄知ってるって、知りません。野田秀樹知ってるって、知りません。白井晃、知りません。本当ですよ。そこからですからね。知らなくてもいいのですが、入ってからちゃんと知ってくれれば。もちろん唐十郎知りません。チャーホフ知りません。シェイクスピア聞いたことあります。宮藤官九郎知ってます、みたいな。そこからのスタートなので、中学生もそうでしょう。そこからですよ。

(眞野構成員)

でも、高校生でシェイクスピアの本当のエッセンスみたいなものだけでも18歳までに経験できるとすごいなと思いますけどね、この学科でね。成功すると思いますけど。それはやっぱり先生のライブ力ですね。きっと。

会長 (能祖構成員)

お時間もなくなってきましたが、最後にこれだけはこのことがございましたらおっしゃっていただければと思いますが、よろしいですか。はい、ありがとうございます。他の資料というのは。

(事務局)

お手元に東京ですとか埼玉、大阪、兵庫の実際に専門学科を置いている学校の状況をホームページから抜き出したものを、皆様限りで御用意させていただいております。こちらを御覧いただき、中にそれぞれの学校の、先程少し触れていただいておりますけど、教育課程、こういった内容を一年生から三年生まで学んでいるのかというのが見えるようになっております。そういったものを少し見ていただいて、次回、私共のほうで他県の状況も見ながら教育内容についてこんなものがあったらいいのではないかというようなことをまた議論の場に出させていただきますので、それに当たっての参考として、御覧いただければと思います。よろしく願いいたします。

会長（能祖構成員）

ありがとうございました。それでは、第1回の協議会を終了させていただきます。